

〔例会報告〕

2007年度第3回 JAMS 関東例会（2007年11月24日）報告

ダウド・ブルエとインドネシア共和国独立闘争
—脱植民地化期アチェにおけるイスラム教指導者の役割—
西 芳美

マレーシアの建国過程におけるプラナカンの役割
—サバのマレーシア参加の事例から—
山本 博之

レビュー執筆者・久礼 克季（立教大学大学院博士課程後期課程）

さる2007年11月24日、立教大学において本年度第3回目のJAMS関東例会が行われた。今回はJAMSならびに日本マレー世界研究会（JA'AM）の合同研究会という形式をとり、西芳美（東京大学「人間の安全保障」プログラム）による「ダウド・ブルエとインドネシア共和国独立闘争—脱植民地化期アチェにおけるイスラム教指導者の役割—」と、山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）による「マレーシアの建国過程におけるプラナカンの役割—サバのマレーシア参加の事例から」の2つの報告が行われた。

はじめにおこなわれた西報告は、インドネシア独立闘争期のアチェをとりあげたものである。西は、当該時期においてみられた、アチェのインドネシア共和国政府への支持はどのような意味を持っていたのかという問題について、1947年アチェ軍政知事に就任したイスラム教指導者ダウド・ブルエの役割に注目することで、再検討を試みた。

報告のなかで、西は次のように指摘する。オランダ植民地統治下のアチェにおいて、新しい時代に対応するための知識、技能、人脈を獲得するための重要手段の一つとして、イスラム教育機関への期待が高まった。これを受けて現地においてイスラム教育機関が大きく発展していくなか、1939年アチェ全域のイスラム教育機関の連携をめざすPUSA（全アチェ・イスラム教指導者同盟）がダウド・ブルエを議長として設立された。そしてこのPUSAの活動は、各自治領の枠を越えて発展し、各地で結社が下部組織として参加した。その後、インドネシア共和国独立闘争が展開していった1945年の8月から10月、アチェでは自治領首長層を含む行政担当者を含めてインドネシア共和国独立宣言への支持表明がなされる。この背景には、スカルノの指導するインドネシア共和国が国際社会の支持を得ることが期待されるなかで、これを支持することがアチェ自らの国際社会における自立につながるという意識があった。この後、日本軍の武器譲渡問題に端を発したチュンボック事件や3月革命といったアチェ北海岸部の治安悪化と社会革命の発生に伴う社会的混乱の収束、またオランダの侵攻に対応するため多様な武装勢力のインドネシア国軍への統合といった二つの問題への対応が図られた。このなかで、チュンボック事件や3月革命において当事者の

仲介役を担いアチェの非正規軍指導者とのつながりをもっていたダウド・ブルエが、アチェの軍政知事に就任することになった。以上のことから、アチェにおけるインドネシア共和国支持は、アチェ域内における社会的混乱の収束と国際社会への窓口としての期待という二つの側面から理解できる。また、脱植民地化期にイスラム教指導者が仲介者としての役割を果たしたことが、その後のアチェにおいてもイスラム教の社会的役割を固定化させる契機になっているのである。

この報告をふまえた討論では、アチェと関係を持った外部社会に国際社会は含まれるのか、同様にそこにジャワ島は含まれるのか、当時国際社会との関係の窓口として国民国家としてのインドネシア共和国が必要だったとアチェが認識していたか否か、などといったアチェと外部世界との関係についての議論が中心となった。またそのほかにも、イスラム教育機関の重要性やダウド・ブルエの仲介者としての資質などといった問題にまで議論は進んでいった。

引き続き行われた山本報告は、英領マラヤからマレーシア建国にかけての時期におけるサバのプラナカンをとりあげたものである。報告において山本は、まずプラナカンをマレーインドネシア語で「子」を意味するアナックから派生した、外来者性を持ち、文化的混血者性を持ち、現地化し、更にはこの三要素を自覚していることが思想や行動に現れる「外来者の現地生まれの子」とする。また、領域によって規定されないマレー人概念の拡張と収縮に伴ってプラナカンが生み出されるなかで、プラナカンは自らとマレー人を合わせた包摂的な集合アイデンティティを唱える、とした。そしてそのうえで、次のように指摘する。マレーシア建国時におけるサバのマレーシア参加においては、「オーストラリア人の父親とカダザン人の母親から生まれた」と語られ自らを「アナック・サバ」と語るといったようなプラナカン性を備え、1953年にはサバ初の英語日刊紙『サバ・タイムズ』を創刊し1955年には立法参事会議員に任命されるなどの活動を行っていたドナルド・ステファンが、サバと連邦の政治指導者たちとの仲介役として重要な役割を担っていた。このステファンの政治的支持基盤となっていたのがカダザン人（サバ内陸部の非ムスリム諸族の一つドゥスン人のうち、プナンパン地方に居住していた人々が自ら名乗った呼称）である。カトリックを受容し英語教育を受けていた彼らプナンパン・カダザン人は、「マレー人であるかないか」が重要であるマレー世界にあって、当初はイギリス帝国の枠組みで英語教育とキリスト教を通じてドゥスン人を「文明化」することによって自らの地位向上を試みた。しかしその後、ステファンの補佐役であった K. バリによって提唱された「バンサ・サバ」といったサバをバンサ（民族）とする考え方がもたらされると、彼らは、マレー世界にありながら自らをマレー人ではなくカダザン人と名乗るようになった。そして、1961年アブドゥル・ラーマン首相のマレーシア構想が出されると、彼らは原住民の生活水準の引き上げをもたらすものとしてこれを受け入れた。こうして、1963年サバはマレーシア結成を通じてイギリスから独立し、ステファンが初代サバ州首相となった。ナショナリズム運動の初期にプラナカンが重要な役割を担う事例は他の地域にもみられるが、このようにサバでは独立達成に至ってもなおプラナカンがプラナカンとして政治的に重要な役割を担ったのである。そしてこの背景には、プナンパン・カダザン人が、マレー人概念拡張の試みといえ

るマレーシアにおいて「プラナカン」的な役割を自覚しており、それ故に自らの指導者はマレー性を持った人物ではなくプラナカン性を持った人物を望んでいたことがあったのである。

上記の報告を踏まえた討論では、バンサとアナックとの違いやバンサとプラナカンとの関係、サバをバンサと言えるようになった意味、民族とバンサの違い、前近代と近現代におけるバンサの意味や使われ方の違い、などといったバンサについての議論が中心となった。またこれらと関連して、前近代におけるプラナカン、ステファンのプラナカン性とカダザン人のプラナカン性、カダザン人を自称しカダザン人協会を組織し活動していた人々の中心層、作られたエスニシティとしてのカダザン人、などといった問題にも議論は展開していった。

今回の例会で発表された両報告は、西報告ではインドネシア共和国独立におけるアチェのダウド・ブルエ、山本報告ではマレーシア連邦独立におけるサバのドナルド・ステファンといった地方エリートの役割の重要性や、それが可能となった背景にあるイスラム教やプラナカンといった要素を明らかにしたもので、非常に興味深いものといえる。そして、そのようなイスラム教やプラナカンの要素がその後のアチェやサバの動向を決定づけたことを考えると、両報告が当該時代以降の研究にも与える意義は非常に大きいといえるだろう。

お詫びと訂正

会報編集部

本誌第 39 号（2007 年度 11 月 5 日発行）の関東例会のレビュー記事の一部に誤りがございました。お詫びして、以下のように訂正させていただきます。

・表紙の目次

（誤）2007 年度第 2 回 JAMS 関東例会報告 久礼克季

→（正）2007 年度第 1 回 JAMS 関東例会報告 久礼克季

（誤）2007 年度第 3 回 JAMS 関東例会報告 大川知恵

→（正）2007 年度第 2 回 JAMS 関東例会報告 大川知恵

・26 ページ タイトル

（誤）2007 年度第 2 回（2007 年 5 月 12 日）JAMS 関東例会報告

→（正）2007 年度第 1 回（2007 年 5 月 12 日）JAMS 関東例会報告

・26 ページ 本文第 1 行目

（誤）5 月 12 日、立教大学において本年度第 2 回目の JAMS 関東例会が開かれ、

→（正）5 月 12 日、立教大学において本年度第 1 回目の JAMS 関東例会が開かれ、

・28 ページ タイトル

（誤）2007 年度第 3 回（2007 年 7 月 7 日）JAMS 関東例会報告

→（正）2007 年度第 2 回（2007 年 7 月 7 日）JAMS 関東例会報告

（以上）